

本のネーミング

偶々ある会合の2次会で、精神科医で作家の加賀乙彦さんと隣り合わせになった。「甲・乙・丙」のうち甲彦ならともかく、なぜ乙彦と、敢えてイメージ的に劣るペンネームをつけたのだろうかかね不思議に思っていた。そこで不躰にご当人にその謂れを尋ねてみた。すると突然顔を真っ赤にして、「あなたは僕の本を読んでいませんね」とえらい剣幕で怒り出したのである。傍でやり取りを聞いていた小中陽太郎さんが「近藤さんが加賀さんを怒らせた」と言いふらし面白おかしく噂が広がった。その加賀さんの著書にはすべて名前の由縁が書かれているという。だが、その後読んでみた「宣告」では、乙彦の名の謂れまでは分からなかった。

ご機嫌の直ったところで、大作家を目の前に畏れ多くもお互いの作品を名乗りあう光栄なる成り行きとなった。加賀さんは、拙著「新・現代海外武者修行のすすめ」「停年オヤジの海外武者修行」や、「南太平洋の剛腕投手」について「まあ好いと思いますよ。でもできればもう少し短い方が良いでしょう」と仰った。

「私の本で一番ヒットしたのは『宣告』です。どうです。短いでしょう？」と同意を求めるように語り、他にもいくつか自著の書名を挙げられた。「高山右近」「雲の都」等々、確かに短くて憶えやすい。そのうえで、漱石だってそうでしょうとも言われた。確かに夏目漱石の名著「こころ」「門」「草枕」「三四郎」や、森鷗外の「雁」「高瀬舟」「山椒大夫」など、みんなどちらかと言うと書名は簡潔で短い。「源氏物語」「枕草子」「太平記」「奥の細道」など古典も概して短い。外国の名作でも「リア王」「レ・ミゼラブル」「ファウスト」「嵐が丘」「大地」「老人と海」「復活」など書名は一般的に短い。では漱石の短い書名を称賛した加賀さんは、「吾輩は猫である」についてはどう思っているだろうか。

ごく最近知人の軍事評論家・小川和久さんが「戦争が大嫌いな人のための正しく学ぶ安保法則」なる長い書名の作品を出版された。果たして加賀さんはこれをどう思われるだろうか。